

Pichio



el Zorro

ノーベル賞 文学全集

NOBEL PRIZED
LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集 8

マルタン・デュ・ガール
ピランデッロ

訳者 米川良夫
青柳瑞穂
赤沢 寛

授与演説および受賞演説の収録に際し
ては、集英社のご厚意を得ました。

昭和46年2月5日 発行

発行者／石川 数雄

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台1-6

郵便番号 101

振替 東京180番

電話 東京294-1111 (大代表)

印刷所／凸版印刷株式会社

製本所／寿製本株式会社

大口製本印刷株式会社

本文用紙／本州製紙株式会社

表紙／日本クロス工業株式会社

製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社 1971 Printed in Japan

0397-522089-3062

編集顧問

川 端 康 成

芹沢光治良

編集委員

高橋健二

佐藤亮一

白井浩司

山 室 静

表紙装画

パブロ・ピカソ

装丁

原 弘

目次

ロジェ・マルタン・デュ・ガール

選考経過……シエル・ストレムベリイ……………	飯島 勉訳……………6
授与演説……ペール・ハルストレーム……………	菅野昭正訳……………10
受賞演説……………	菅野昭正訳……………14

ジャン・バロアの生涯……………	青柳瑞穂訳……………17
-----------------	--------------

人と作品……アンドレ・ベルヌリジョフロワ……………	飯島 勉訳……………209
著作目録……………	飯島 勉編……………414

ルイージ・ピランデッロ

選考経過……シエル・ストレムベリイ……………	大久保敏彦訳……………	232
授与演説……ベール・ハルストレーム……………	米川良夫訳……………	236
受賞演説……………	米川良夫訳……………	240
故マツティーア・パスカル……………	米川良夫訳……………	243
夢(もしくは真実)……………	赤沢 寛訳……………	389
人と作品……マリオ・アボロニオ……………	大久保敏彦訳……………	401
著作目録……………	米川良夫 大久保敏彦 編……………	416
肖像画／ミッシェル・コーヴェ……………	4……………	230
カラーさしえ／ビエール・ラファージュ……………		
(マルタン・デュ・ガールの作品)……………		
48 ～ 49、80 ～ 81、112 ～ 113、		
144 ～ 145、176 ～ 177、		
リナ・リラ・デ・ノビーリ……………		
(ピランデッロの作品)……………		
248 ～ 249、280 ～ 281、352 ～ 353		

ロ
ジ
エ
・
マ
ル
タ
ン
・
デ
ュ
・
ガ
ー
ル

一九三七年受賞(五十六歳)

(フランス 一八八一〜一九五八)

ジャン・パロアの生涯



Roger Martin du Gard

マルタン・デュ・ガール

選
考
經
過

授
與
演
說

受
賞
演
說

ロジェ・マルタン・デュ・ガールに 対するノーベル賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官

シエル・ストレムベリイ

ノーベル文学賞が、全10巻で構成されている連鎖小説『チボー家の
人々』に於て、人間の闘いと現代生活の主たる諸相とを描いた、力
強い現実主義的芸術の功績によって、一九三七年、彼に授与された
時、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの名は多分事前に推測がついて
いたであろう。彼は、シュリイ・ブリュドム、フレデリック・ミスト
ラル、ロマン・ロラン、アナトール・フランス、そしてアンリ・ベル
グソンに次ぐフランス人としてはこの賞の六人目の受賞者だった。彼
によって、ノーベル文学賞の受賞者名簿に記入された受賞者の数で、
フランスは他の国々を凌ぎ、爾来今日までその地位を保っている。そ
の上、彼は、その作品が両大戦間に位置づけられ、いわば新しい世代
に属する作家として、この最高の受賞の栄に輝いたフランスの最初の
作家であったことは、注目すべきである。

三十六人の候補者が競い合っていた。これらの人々の中には、強力
な競争相手がいないわけではなかった。更に、その中には、数人のフ
ランス人も含まれていた。即ち、ポール・ヴァレリー、ジョルジュ・
デュアメル、不幸にして発言権を持たない米仏の多数の礼賛者たちに
推薦されていたジャン・ジオノ、そして、初顔のポール・クロアデル。

スカンディナヴィアの新聞は、誰一人としてその功績を否めるもの
のないマルタン・デュ・ガールの外に、それから二年後に賞を獲得す
ることになった、フィンランドの小説家フランス・エミール・シラン
ペーの名を強く推した。

『チボー家の人々』の作者が、一九三四年以来非常に地味な候補者だ
ったのに、今回ほとんど戦わずして、その競争の勝利者として浮かび
上がったとすれば、それは、彼が一九三六年、長年の沈黙の後に、
あの主たる作品を完成した直後であったことに因っている。二十年代
に発表され、全ての外国語に翻訳されていた最初の六巻は、既に非常
に有利な報告の対象となっていた。実際の訴訟に移るためには、続編
だけが待たれていた。その終巻と目されていた続編、『一九一四年夏』
は、前作を一つに集めたほどの分量からなり、前作に劣らず内容の充
実した小説であり、この作家がその創作能力をいささかも失っていな
かったことを審査員たちに証明した。『エビローグ』は、数年後、奇
妙な戦争』の最中に発表されたが、既に一級品の折り紙を付けられて
いた作品に、欠くべからざる如何なるものをも付け加えなかった。

ノーベル委員会の最初の報告者は、ルンド大学の文学史教授、オル・
ホルムベリイ氏だった。『チボー家の人々』に対する深い分析のあと
で、彼は結局この連鎖小説がノーベル賞に値するに十分な資格を具え
ているだろうかと考えた。これまでも三度、作家の全作品よりも、レ
イモントの『農民』、ハムソンの『土の恵み』、そしてトーマス・マンの
『ブデンブローク家の人々』などのような特定の個々の作品の方を称え
て、ノーベル賞がこれらの作家たちに授与されたことがあったことを、
彼は回想する。『チボー家の人々』は必ずしもそれらの作品と同じ血脈
に属しているとはいえないが、同等の価値を持つている作品ではある
まいか？ この間に、報告者は無条件の肯定によって答えることをた
めらわれない。『チボー家の人々』は、彼の意見によれば、あらゆる観点
からみて、以前ノーベル賞によって報われた、先に挙げた偉大な小説
と同様に重要な作品なのである。その上、選考の対象に値するのは、
ロジェ・マルタン・デュ・ガールのこの作品のみに限られることでは
なく、その外に、彼は特にデュ・ガールの青年期の作品『ジャン・パ
ロア』を挙げる。それは、彼が言うように、もう一方の作品への重要
な序章となった、やはり偉大な小説である。その主人公はその時代
——ドレフュス事件の時代——のあらゆる道徳的・宗教的問題に曝さ
れている一種のフランス人のニールス・リーネであり、その不安な魂
が『一般的諸観念への盲目的崇拜』に忠実である限り、病んだ意識の人
間であろう。そして報告者は次の点に注目する。『ジャン・パロア』以

後、マルタン・デュ・ガールは、もはや主として、問題の《理屈っぽい提起者》ではなく、広い体験と、比類のない観察力と洞察力とに恵まれた、専ら人間と生活との画家となった。そして、一般の観念が多分に人間の問題に打ち勝っている連鎖小説、『善意の人々』を当時発表し始めていたジュール・ロマンと後日比較すれば、『チボー家の人々』の作者のほうが明らかにすぐれている。

『一九一四年夏』の刊行後、本職が同じく文学史家であるもう一人の報告者が助けに呼び出された。『チボー家の人々』のこの新しい巻の刊行以前は、人間の魂の探究者としての非凡な才能と、熱烈な現実性に貫かれた諸観念の《流布者》としての才能とを併せ持つ、ジョルジュ・デュアメルの方に一層引かれるものがあつた、この報告者は述べる。しかし、この新しい書によって、ロジェ・マルタン・デュ・ガールは、心理学者と哲学的精神との美点を、デュアメル同様に持っていることを示した。故に、この報告者は等しく功績のあるこの二人の候補者のいずれか一方だけに賛意を表明するのは差し控えようとした。ジュール・ロマンに関しては、ストックホルムのアカデミー会員たちの選択が、最終的に『チボー家の人々』の作者に決定した年の、一九三七年には、もう候補者から外されていた。

この選択は受賞者とその審査員たちとを等しく榮あらしめる喜ばしい出来事として、世界のいたる処で歓迎された。審査員の一人、アンダーシュ・エステルリング氏は、『ストックホルム・ティディニンゲン』紙上で、『スウェーデン・アカデミーは、ロジェ・マルタン・デュ・ガールという個人によって、今日までずっと世界文学に絶大な影響を及ぼしてきたフランス写実主義に対して初めて報奨を与えた』ことを認めている。ところで、この新しい受賞者は、ニースで朗報に接したが、彼の過去や現在の仕事や将来の計画などに関して慣例的な質問をするために馳けつけた新聞社の多くの代表者たちを、概して失望させたことは事実だ。彼の住居の門は閉ざされたままだったのだ。生涯、ベレームの隠者——オルヌにある住居を、彼はバリーニースでの短い滞在のためにまれに離れるだけだった——は、あらゆる公私の問題を注意深く避け、文学生活に関するあらゆる社交界の意志表示から厳しく自己を遠ざけた。そして一夜にして榮光の中に迎え入れられたとはいえ、彼は終始守ってきた沈黙の禁制を他人に破らせようとは

しなかった。それは彼がストックホルムに到着するまで続いた。しかしそこで彼は直ちに態度を変えた。そして、二週間に及ぶ滞在期間中、新聞記者とさえ、この世の人々の中で最も愛想のよい、にこやかな人間として振舞った。

後のノーベル賞作家、アルベール・カミュは、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの『全集』(ブレイヤード版、一九五五)の刊行のために依頼された序文の中で、受賞以後の作者の立場を次のように表現した。《人と作品とは隠れ家の中で同じ辛抱強い努力によって鍛えられたのだ。ロジェ・マルタン・デュ・ガールは誰一人その電話番号を知る者のない我々の偉大な作家の一人のかなりまれな典型である。今や、この作家は我々の文壇に確固たる位置を占めている。しかし彼は水に溶けた砂糖のように、そこに溶け込んだのだ。榮光とノーベル賞とは、敢えて言うなら、彼に闇の付録を与えることになった》

一九三七年の受賞者が、フランスでは若干の極右の新聞を除いて、いわゆる新聞の好評は受けたとしても、この選択は文学界に於ては多少とも意外な感じを与えないではなかったように思われる。最後にフランス人が偉大な哲学者アンリ・ベルグソンに授賞されてから、既に十年が経過していた。ノーベル文学賞が次に七人目のアンドレ・ジイドに榮光を与えるためにフランスに再び戻ってくるまでには、更に十年を待たねばならなかった。唯、ジイドの作品の道德的暖昧さは、贈与者の遺贈条項にあてはまらないように思われていただけに、この受賞は更に一層の驚きを与えた。しかし、『チボー家の人々』の作者に対して、この種の考察は問題とされなかった。唯彼の受賞が意外であったのは、他の多くの文人たちが彼以上に世間の注目を集めていたという全く単純な理由からである。その中には、——ここに、『カンデイド』の年代記作者、フェルナン・ヴァンテラン氏の名を挙げる——『赤いネクタイ』を締め、もう榮誉など眼中になく、既にストックホ

1 一八九四年、ユダヤ人の将校ドレフュスが、ドイツへ軍事上の機密事項を売り渡したという嫌疑をうけ、民族的理由により、軍事裁判で不当に有罪の宣告を受けた事件。結局、ドレフュスは、ゾラやクレマンソーなどの援助で一八九九年に釈放されたが、この事件は民族主義と人間本来の権利をめぐる、フランスの世論を二分するほどの大きな事件に発展した。

2 デンマークの作家ヤコブセンの同名の小説(一八八〇)の主人公。

ルムの巡歴を終えていた、二、三人の「不滅の人々」(フランス・アカデミー会員)、それから、略綬を身につけた一握りの人々が含まれていた。後者の人々は緑色の外套がないので、数年来ずっとスウェーデンで講演をしたりして、己の名を顕わすために、最善の努力を傾けており、スウェーデンに於ける知名度の点で勝っていた。そして、あの皮肉な觀察者によれば、マルタン・デュ・ガールの場合から引き出した教訓はこうなのである。

《なるほど、ストックホルムの評決が先ず第一に我々に明らかにしたことは、スカンディナヴィアの審査員には外見よりも中味が明らかに重んぜられており、候補者のアカデミーへの加入とその威厳とが彼らに及ぼす影響は取るに足りないということだ。一方それにも拘わらず、彼ら審査員は、彼らの厚情を得るための密やかな努力に無知であるように思われるが……》

何はともあれ、なかなかそのような酷評の矢面に立たされていた、《不滅の人々》の一人、ジョルジュ・デュアメルは、新しい受賞者を、『マリアンヌ』の中で次のように歓迎している。

《このすばらしい物語作者は一つの純粹な心情だ。彼は三週間前、私に次のような手紙をくれた。『私はもう決して世評の人となることはないでしょう。けれども、そうしたことは我々に関わる問題ではないのだ。この新しい心理学者には心理学が欠けている。彼は名譽から逃れようとしたが、名譽の方から彼をその隠れ家に訪ねてきたのだ。彼はもう栄光で目のくらむ白日を逃れることができない。彼とは反対に、私はそれを喜ばしいことだと思う。何故なら、たとえロジュ・マルタン・デュ・ガールを愛するとしても、私はロジュ・マルタン・デュ・ガールより一層文学を愛しているからだ』》

『時代』の中で、アンドレ・テリヴ氏は、ロジュ・マルタン・デュ・ガールへのノーベル賞授与を彼なりに次のように解釈する。

《ロマン・ロランとアナートル・フランスに次いで、もう一人のフランスの作家がスウェーデン・アカデミーの賛同に価するために、若干の特殊な条件を充たすことで得をしていることは明らかだ。もしそれが右翼の精神であれば、たとえ曖昧な表現を用いたとしても、国境を越えた如何なる魅力をも示すことはないであろう。とりわけ、フランスが過去にその名をなさしめた伝統に忠実であることが待たれている

現状に於ては。全世界的なモラリストの価値もまた提示しなければならぬ。その点に関しては、作品の本質的な豊かさ或いは美点は、必ずしもその作品が遠い国に惹き起こす関心に対応しているとは限らない。エドゥワール・エストニエ氏は、私の情報信じるなら、見事にノーベル賞を受けそこねたのだが、アンドレ・ジッド氏は、全ての国で有名であったとはいえ、難儀せずに賞を得た。ヴァレリー氏、デュアメル氏、ジュール・ロマン氏は尚それを望むことができるであろう。しかし、純粹なカトリック教徒であり、我々の地方の特殊な環境の画家であるモーリヤック氏がそのような立場の人かどうか、私には怪しいと思われる。》

このような説明の価値はどうであれ、残念なことは、右に挙げた六人の作家の中で、官選の資格を持たない、ジッドとモーリヤックだけが結局熱望された賞を獲得したということである。

《ロジュ・マルタン・デュ・ガールは幸運な人だ」と、現在は『ル・モンド』紙で広い読者層を得ている、文芸評論家ビエール・アンリ・シモン氏は、かつて若かりし急進家として、『現代』の中で断言する。そしてこう続ける。《パリ市が彼にその大賞を授与するや否や、今度はストックホルムのアカデミーが世界中の作家たちの羨望の的になっている報奨を彼に与えた。それはいわば、腕ききの狩猟家のように、最良の薬包を最後まで残しておくことによって、一石二鳥を射止めるようなものだ。……アナートル・フランス以上に、そして別な意味でロマン・ロラン以上に——彼らもまた、かつてノーベル賞の名譽を得た——彼は我國の文化の非常に豊かで、健全で、特徴的な一地方、我國の精神のイール・ド・フランスのような何かを外国に対して提示するに価する人だった》

夫人と、パリの大学都市のスウェーデン高等学校の校長である、旧友リュシヤン・モーリと同伴で赴いたストックホルムが、ロジュ・マルタン・デュ・ガールには大変気に入ったので、ノーベル文学賞受賞者を待ち受けるすべての行動と演説とを欣然としてにこやかに済ませた後、滞在を二週間引き延ばすほどであった。彼の記者会見は、私生活を持ち、著作に没頭し得るためにそれを完全な状態で保つという、作家の聖なる権利に対する雄弁な弁護であった。何故なら、彼が述べたように、《どんなに謎めいた芸術家でも、自らの仮面を剥ぎ、思わす

知らず自らの秘密を打ち明けるのは、著作に於てなのだ」から。

ノーベル賞の授賞日、コンサートホールの花で飾った壇上に、王室と向かい合つて座を占めた時、ロジェ・マルタン・デュ・ガールは、新聞によつてスウェーデンに報じられていた敬愛の宣言によつて、既に参列者のありとある好感を勝ち得ていた。先ずスウェーデン・アカデミーの終身幹事であり、ノーベル委員会会長であるベール・ハルス・トレム氏が、彼の作品に惜しめない賛辞を献げた。それから激しい吹雪の中を、彼はシテイホールの祝賀会へ向かった。そこで、最高に着飾った五百人を前に、彼は公の場で初めての演説を行なった。その深遠で、輝かしい演説の中で、彼は先ず、『彼の精神と芸術との形成に決定的な影響を及ぼした不滅の模範』——トルストイの偉大な肖像を思い起こし、次いで授賞決定の際に、特にスウェーデン・アカデミーの注目の対象になったと考えられる、彼の最新の小説『一九一四年夏』の感動的な主題を展開させた。

常よりも一層熱狂的な拍手喝采の嵐——マルタン・デュ・ガール夫人の傍に座していた、現スウェーデン王、当時の王位継承者がその率先者であつたが——が、多彩なモザイク造りの輝くばかりの広間の円天井に鳴り響いたと、参列した一人が語っている。私も同席しており、その証人となることができる。

数日後、ロジェ・マルタン・デュ・ガールは、十八世紀に創立されたスウェーデン・アカデミーの美しい祝宴の広間で、専ら彼の青年期の小説『ジャン・パロア』に関する二回目の演説を公衆の前で行なった。『ジャン・パロア』は、彼が言うように、それは単に人間の歴史、人間の意識の劇に他ならず、そこには如何なる弁証法的意図も含まれてはいない。そしてその演説の終わりに、彼のあらゆる書物の巻頭に好んで記し、終始彼の念頭を離れなかつた、モンテーニュの意味深長な言葉、「私は教訓を垂れているのでない、私は唯語っているだけである」を引用した。

スウェーデンの首府での長い滞在に関して、ロジェ・マルタン・デュ・ガールは、後に『新フランス評論』誌（一九五八年十二月一日付マルタン・デュ・ガール追悼特集号）によつて公にされた一友人への手紙の中で、幾分ユーモアを含んだ、非常に率直な報告をしていた。それは次のような内容の手紙であつた。

「今度のバリ、ストックホルムへの旅には、どことなく言葉では、言えないものがありました。私はまるで映画スターのように一カ月を過ごしたのです。少なくとも私は一時の名声に乗じて、胸につかえている多くのこと、それは場合によつてはある反響を呼びもしましたが、その事々を公に述べることができました。けれども今は、肉体的にも精神的にもひどく疲労しています。そして今の私には、あの騒擾とした、信じ難い体験を消化するため、これまでより一層、沈黙と孤独とが必要なのです……妻は耐え忍んではくれましたが、極地の寒冷による気管支炎には大分悩まされたようです。私を疑わないで下さい。今私に起こっている全てのことは重大なことです。それは今後何一つ変化を来すことはないだろうと確信しているのですから。私はしなければならぬ一切のこと、私を待ち受けている一切のことを仕遂げてきたのです。私のスウェーデン滞在は足跡を残したことと思います。それは私の望む意味ではありますが。しかし今の私は幾分、病氣あがりの人間のようなものなのです……」

これ以上うまい結論はないであろう。ロジェ・マルタン・デュ・ガールは心安らかにフランスに戻ってくる事ができた。彼はノーベルの国で立派に使命を果たし、その国に、あらゆる名誉に値する文人としてのみならず、なかなしく一人の人間、いわばその言葉の本来的な意味での紳士の想い出を残した。

1 フランス・アカデミー会員が入会演説や例会で着用する礼服。

2 バリを首都とする古代フランスの州名で、今日のエヌ県、ウワーズ県、セーヌ県、マルヌ県などを含む。フランス精神文化の中心地。

ロジェ・マルタン・デュ・ガールに対する ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事

ペール・ハルストレーム

一九三七年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

一九三七年度ノーベル文学賞の受賞者であるロジェ・マルタン・デュ・ガールは、その活動の大部分をもつぱらただひとつの作品、すなわち『チボー家の人々』という総題をもつ一連の連作小説に捧げてきたのであります。これは冊数の点においても、視野のひろさにおいても、膨大な作品であります。さまざまな性格の人物を画廊に並べるようなやりかたで、また第一次世界大戦にさきだつ十年ばかりの間、フランス人の心を捉えていた知的潮流やさまざまな問題を分析するというやりかたで、現代のフランスの生活を表現しているわけでありますが、それはこの小説の主題が許すかぎり充実した画廊であり、完璧な分析なのであります。したがって、作品は現代の特徴をとくによく表わすような形態をとるようになりましたが、これは発祥の国においては、『大河小説』とよばれているのであります。

その用語はあるひとつの叙述方法を指しておりますが、それは構成ということには比較的こだわらずに、川がその流路に見出されるあらゆるものを映しながら、いくつもの広大な地方を横断してゆくような

ぐあいに進む方法であります。このような小説の本質は、大きな問題を扱う場合も小さな問題を扱う場合も、各部分が調和のとれた均衡を保っているということよりはむしろ、その反映の厳密さということに存します。そこには形というものがありません。川というものは勝手にだらだら流れたりするものであり、底のほうの流れがほんのときたま、表面の滑らかな流れを乱すことがあるにすぎません。

現代を静かな時代と言うことはまずできませんまい。それどころか、さまざまな機械の速度によって、擾乱といつてよいほど生活のリズムは早められております。したがって、このような時代に、小説というもつとも人気のある文学形式がまったく反対の方向に発展していったり、そうすることによってさらに人気のあるものになったりするのには、奇妙なことでもあります。にもかかわらず、もし小説が申し分ない幻想の世界をわれわれに提供してくれんとするならば、この現象は、心理学の用語を使って、日常生活の欲求不満に対する一種の詩的代償作用と説明することができます。しかし、この小説がこれほど時間をかけて明瞭に語り、はっきり強調しようとしているものは、まさしく現実に対する悲痛なる不安なのであります。

といつても、この小説は果てしなく豊かな内容をそなえつつ存在するのであり、読者は自分が獲得してゆく意識の高まりのなかに、あらゆる生活に内在する避けがたい悲劇の要素に対する一種の慰めを見出すのであります。一種のヒロイズムというべきものによって、この小説は現実をがっぷりと大きく呑みこみ、大きな苦しみをすら、喜びをもって耐えるようわれわれを勇気づけます。読者の美的な要求は、他にくらべてよりよく凝縮されている、したがって読者の感情を刺激するのによりふさわしくなっている幾つかの孤立的な部分において、満たされるのであります。『チボー家の人々』は、そのような部分を欠いてはおりません。

小説の主要人物は同じ家族の三人の人間、すなわち父と二人の息子であります。父は背景にとどまっています。その受動的な役割、重要で重々しい役割は、特殊な技法で紹介されます。二人の息子と無数の脇役的人間は、劇のようなやりかたで紹介されます。話の筋のなかではなんの伏線も用意されぬまま、われわれはいきなり、いま現に行動したり話したりしている彼らを、眼の前に見ることになります。もし

て、詳細かつ完全な舞台装置の描写をあたえられるのであります。読者は自分が見聞するものを急いでつかみとらねばなりません。というのは、人生の気紛れで不規則なりズムが、いたるところで響いているからです。作者の最高度に完成された道具によって、すなわち言葉のむこう側に表現される主人公たちの思想の分析や、意識的な行動を産みだす暗部を見ぬく洞察力などによって、読者のなすべき仕事は援助されます。マルタン・デュ・ガールはさらに遠くまで行きます。思考、感情、意志が言葉や行為になる前に、どんなふうに変えられ得るものであるかを彼は示します。ときには外側からの考察によって——癖、虚栄心、あるいは単なる不器用さなど——表現や個性を変えられることがあります。このような精神の動的な作用についての検討は、精妙であると同時に奔放なものであります。これはあきらかに、人間を描く芸術に対してマルタン・デュ・ガールが果たした、もともと独創的でもっとも注目すべき貢献となつていたのであります。美的な観点からすると、これはかならずしも利点とは限りません。なぜならば、分析の結果が物語にとつて必要欠くべからざるものと思われぬような場合には、分析はわずらわしいものに見えるからです。

このような内観的方法是父の性格に対してさえ用いられておりますが、この父の場合には、さほど複雑ではありません。彼の個性は、小説の発端ですでに明確かつ完全なものとなつております。というのは、彼は過去に属するからであります。現在の事件はもはや彼の心を動かしません。

彼は自分の身分と義務とを自覚した、上流中産階級の一員であり、「教会」の忠実な僕であり、いろいろな慎重な忠告をしてくれる寛大な慈善家であります。実際、彼は彼自身のそれよりも前の世代に、七月王政のフランスに属するような人間であります。それゆえ、彼はつぎの世代、とくにその息子たちとものと激しく衝突することになります。だが、この衝突が口頭の水準に達することはごくまれにしかありません。というのも、老人は自分の真価をはっきり確信しているのです、議論を戦わせたりしないからです。ですから、若さと老年の対立という永久不変のテーマは、ここではことさら扱われることはないのです。老年の典型であるということは、なによりもまず、その内省的態度、頑として意見を変えぬ態度にあらわれております。彼は賢明で正しい

と思うあらゆるものを、重々しく、自若たる態度で頼みにしております。いかなる言葉も彼に影響を及ぼしません。このような悲劇が起こる可能性に対して、彼自身がこれほど完全に無警戒でないとしたら、彼の人生の孤独さのなかに、完璧な老年の悲劇が見てとれたかもしれせん。

彼はどちらかといえば、喜劇的な特徴で性格づけられております。深い感情は自分の死のとき、自分の運命に直面したときにあらわれます。この感情の表現は直接あらわれるのではなく、臨終の苦悶に長いこと耐えるありさまを、厳密に、直観的に、具体的に描く描写の結果として産みだされるのです。これは細部がじつに微細であるにもかかわらず、感動的な描写であります。それまでのところ、彼が世人に示す外面のうしろに隠されているもの、自分自身にさえ隠されているものを明かす若干の稀有なる瞬間を除けば、彼はもっぱら外側からのみ考察されていたのであります。

この彼と長男との違いは、あまり強調されておりません。アントワーヌ・チボーは医師です。職業にすっかり専念しきつていたので、父の精神的な、倫理的な見地は彼にはまったく無関係なのです。彼のなかでは、道徳性は、強烈かつ意識的な研究への献身と職業の実践とに置きかえられます。自己抑制に長じ、慎重で、そのない人間である彼は、ひとと対立しようなどという欲求はいささかもっていません。そんなことを考える時間すら彼にはないのです。小説のなかでは、あらかじめ定められた限度内での彼の急速な成長が見られることになりました。彼は将来に対して野心をもつ男です。はじめ彼はときにいささか間が抜けていることもありましたが、やがてその仕事によって敬意を集めるようになります。

アントワーヌは、彼の時代の知識人の好ましい典型、いろいろな創見に富み、ものの考えかたに偏見のない人間になります。それがどのようなものであれ、個人が、起こりつつある事態の全体的な流れを変える力はないということを、ひとりの決定論者として、彼はかたく信じています。彼は革命家ではありません。

幾らか年下のせいで、弟のジャックはまったく違います。この人物は作者の心情にあまりにも近すぎるので、どのような批評にも曝されることになりました。彼は作品の主人公であり、外部の世界は彼の理想

にしたがって検討され、判断されます。彼の成長に対する父の責任は大きなものでありますが、しかし現在では、ジャックはその天性のごとくをあげて、革命家となるべき運命を負っています。物語がはじまるとき、彼はカトリックの司祭の経営する学校に通う十四才の生徒です。彼は勉強を嫌って怠けてばかりいますが、利発さで尊敬を集めます。厄介な事件がもちあがるのは、彼が学友のなかから親友をひとり見つけたことですが、この二人の愛情は少年期という危険な時期に、異様に熱っぽく、一見恋愛とも思えるような形をとりまします。彼らの感情は二人の手紙に滲みでており、司祭たちに誤解されて（実際、これはそうならざるを得ないわけなのですから）、司祭たちは懲戒という手段で介入してきます。厳格な監視と、感情に動かされやすい個人生活に対する干渉は、ジャックにとっては耐えがたい侮辱となるのです。さらにその上、彼はこの恥ずべきことに激昂した父の怒りにそなえなければなりません。彼はいつさいの束縛からの逃避行に友だちを連れてゆくのですが、彼はまさにそれまでという束縛に耐えていたのであり、自分に敵対する苛酷な世界のただなかで、そういう束縛を恐怖していたわけなのです。自分の全存在が、現実離れた詩情や、さまざまなおもつと危険な傾向に捕えられて、現実の世界と和解できなくなっていることを彼は感じています。幸福と自由を探しもとめて、二人の少年はアフリカへ赴くのですが、彼らの空想的な計画は、報知を受けた警察の努力によってマルセイユで崩壊の憂きめにあってしまいます。

ジャックが帰宅すると、父はゆきすぎた教育的情熱に駆られて、心理的な間違いを犯します。つまり、父は、自分で設立した感化院に監禁するという罰を、息子に加えるのです。この監禁という圧迫のために、ジャックの負けず嫌いな個性はいっそう強くなり、いっそう手に負えぬものとなってしまいます。こうした成長の記述は、この作品のもっとも感動的なエピソードであります。

兄の力で感化院から解放されたのち、ジャックは唯一の慰めである勉強をつづけることを許されます。彼はすばらしい成績をあげ、野心に富んだ能力ある学生すべてにとつての至上の目標であり、最高の文学的、あるいは学問的な経歴への門戸である高等師範学校に難なく入学を許可されます。しかし、ジャックにとって官途とは空虚であり幻

滅であって、彼がそれにひかれるはずもありません。彼はまもなく冒険と現実を求めるようになります。少年はもう一度アフリカへむけて逃げだすのですが、今度は彼はそれに成功し、長いこと物語から消えたままになります。

彼の姿がふたたび見えるようになるのは、アントワーンが彼の住居を見つけて——スイスの革命家の仲間に加わっているところをです——父の臨終の床へ彼を連れもどすときです。この二つの真っ向から対立する人生観のあいだで、和解が可能であるように思われるとしても、彼がやってくるのはあまりに遅すぎて、和解は成りません。老人は彼だとわからず、ジャックは深い悲歎にくれるのです。それというのも、人類の未来の幸福ということだけに取つかれて、自分のなかのあらゆる人間的な痕跡を消しさることからはじめるような人種に、彼は属していないからです。

小説から知られる限りでは、ジャックの内面生活の輪郭はそういうものであります。それ以外の点では、彼は前と同じく、依然としてどちらかといえばつかみにくい人間ですが、しかし、われわれは彼の才能および性格に対する作者の高い評価に気がつきます。

小説が結末に近づくと、同時にまた、その叙事的な偉大さの頂点に近づくと——世界の大激動直前の一九一四年夏に、であります——われわれは彼を十分に知りはじめます。ジャックは、父の死後まもなく、自分が侮蔑する社会で財産を相続しなければならないという事態を逃れるためにパリを去り、いまジュネーヴにおります。彼は、大衆の叛乱によって戦争の脅威をとどめることを早急の使命とする、社会主義者と共産主義者の団体に所属しています。こうした煽動家の描写は、この書物のなかでもっとも成功していない個所のひとつであります。この個所の全体的な印象は、意図したものであると否にかかわらず、この連中はその使命を達成するにふさわしくない、と思わせるのですから。

けれども、ジャックがジュネーヴをあとにして、その使命を遂行するためにパリへもどつてゆくとき、彼の像は万人の眼にとっていっそう大きくなります。彼の成長は知的なものというよりはむしろ、道徳的なものです。彼の行動は大した成果をあげませんが、しかし彼は自らの魂を救います。パリにおける七月末の数日の描写は、この重苦し

い零屈風のなかで希望と絶望のあいだを揺れうごくジャックの姿とともに、マルタン・デュ・ガールの小説家としての業績における、みごとな力業^{トリス}というにふさわしいものとなっております。この時期の歴史は、大衆の役割が関わりをもつ限り、たえず蘇^{よみがえ}りたえず眼覚めます。しかし、ほほいつもと同じように、その役割は決定的なものではありません。大衆は無力であり、盲目であって、こういう場合においてさえ、かかる悲劇のものである政治の駆け引きには、ふだんと同じように不馴れなままなのです。著者もとくに政治に通じているとは思われませんが、しかし彼は寛容かつ人間的であり、その描写はどこまで進んでも、真実にみちたものとなっております。

このような途方もない不安の背景に対抗して、そこには、完全に異なった性質の、短い、しかしすこぶる啓示に富む挿話があらわれます。ジャックはある娘と再会するのですが、彼は数年前にこの娘に対して恋愛といってもよい感情を抱きながら、他のあらゆるものから逃げだしたごとく、彼女からも逃げさってしまったのでした。今度は二人のあいだに、紛れもない火花が燃えあがります。この抜きさしならぬ恋物語は、小説のなかでもっとも意義ふかい挿話のひとつであります。この挿話はふかい味わいで感じとられますし、その純粹な美しさをそのまま表現されておりますが、それというのも、息もつかせぬ日々の経過によって、この物語が取らざるを得ないひろがり限定されているからに他なりません。これはほんの短いあいだ続くだけです、しかし、それはこの物語に、悲劇的で単純な美しさをあたえるに十分にと足るのであります。

宣戦の布告とともに、ジャックにとってあらゆる政治的幻想が消えさると、彼は、絶望から生まれ犠牲たらんとする意志から生まれた、新しい幻想をみずからあらためて創りあげます。最前線で、彼は破滅的な事態を避けようと努めて、対峙する両軍の兵士にむかって飛行機から訴えかけ、共同の反抗と、兵士たちを捕えている権力を打倒しようという欲求とを、彼らの心に掻き立てようと努めます。躊躇することなく、彼はバリと、愛する女性のもとを離れるのです。

最初の世間からの脱出がそうであったように、この冒険にも、同じ中学生のロマンティズムと現実の欠如とが刻印されてはおりますが、それでもなおかつ、ジャックはいつもながらの逞しい行動力で、

計画を実行します。革命への呼びかけはスイスで印刷され、飛行機と操縦士はすでに準備され、出動は開始されます。それは長い時間つきはしません。ジャックがまだほとんど戦場の上を飛ばないうちに、飛行機は墜落し、すべての搭載物、乗員、ピラの束もろとも炎上してしまうのです。ジャックも傷と火傷の肉の塊^{かたまり}となって、退却するフランス軍部隊のなかに落ちてゆきます。彼に感じとれるものといえば、敗戦の悲しみに対する漠たる感情と、耐えがたい底知れぬ肉体的苦痛だけになりますが、その苦痛は結局、この不運な男はいずれにせよスパイだと考え、一緒に連れてゆくことに嫌気をさしたひとりの同国人の小銃弾で、救われることになるわけであります。

これ以上に辛酸な悲劇の結末、これ以上に残酷な敗北への皮肉を想像するのは、困難なことであります。しかし、マルタン・デュ・ガールは、その皮肉を主人公に向けているわけではありません。おそらく、彼は、この世界に起こるできごとのむごたらしさと残酷さを、理想主義的な傾向に対立するものとして示したかったのでありましょう。彼の辛酸さはたしかにここで正当化されているのですが、しかし、この挿話全体の長い詳細な描写は、周到きわまる厳密さゆえに、ほとんど耐えがたいほど残酷なものとなっております。

ジャック・チボー——われわれが最後にやると知ることになるジャック・チボーの姿は、一個の英雄的な人物像としてわれわれの記憶のなかに生きております。壮大な態度や言辞などまったくなしに、この高潔で、寡黙で、控え目な人物は、遂に偉大さのしるしを受けとるのです。意志と勇気の偉大さ。小説がこの人物に中心を置くときには、その都度、作者のたゆむことない筆は、説得力に富む雄弁を發揮しております。しばしば細部における極度の厳密さでもって、対象をほとんど焼きつくしてしまうような、人間の魂についての鋭利で懷疑的な分析を示したのちに、また可能な限りもっとも微細なりアリズムを通りぬけて、マルタン・デュ・ガールは、人間の精神の理想主義に讃辞を捧げているわけなのであります。

(菅野昭正訳)